

週日の説教（聖モニカの記念日）

金 大烈 神父 2010年8月27日（金）

《涙の聖女モニカ - 子どもの為に流す涙の祈り - 》

今日の福音(マタイ 25・1 13)の話は、昨日と全く同じ内容ですので、福音についての話は省略します。

さあ、今日は聖モニカの祝い日ですが、聖女モニカといえば、思い浮かぶのは『涙』ですね。彼女を言い表す時、「涙の聖女モニカ」と言います。その涙は、大聖人であり神学者である息子アウグスチヌスのための涙です。

この世の中に、息子・娘のために涙を流さない母がいるのでしょうか。いくら立派で評判のよい子どもを持っていても、親の心、特に母の心は、安心より不安に陥る場合がほとんどではありませんか。つまり、涙を流すしかないのが、母親の立場だと思えます。

では、この世の中のほとんどの母親が、たくさんの涙を流しているのにもかかわらず、なぜ聖女モニカだけを「涙の聖女」と呼ぶのでしょうか。息子が回心して聖人になったからでしょうか。いいえ違います。それは、その涙が必ず祈りと共に流された涙だからです。涙と共に祈る母の心を想像してみてください。それは真実でしょう。「自分の存在は無くなっても、この子が生かされれば最高」という切なる願いを持っているのでしょうか。

さあ、皆様はどうですか。お子さんのために、涙を流しながら祈ったことが何回くらいありますか。きっと心配ばかりしていて、「なぜこのようになってしまったのか」とくよくよ考えてばかりいるのではないのでしょうか。「あなたがくださったこの子どもの命をどうか最後までお守りください。」と祈り、感謝の涙、回心の涙、誓いの涙を流しながら、息子、娘のために祈った経験はどのくらいありますか。

いつか申し上げたことがあると思うのですが、『子ども』という存在は、母にとっては十字架です。死ぬときまで十字架になります。カトリック信者である私達は、その十字架の意味をよく知っているのですが、本当に感謝の心でそれを負っているのでしょうか。子ども達のためになぜ泣いているのか考えてみますと、振り返ってみななければならないことが結構あると思います。親と子の関係は、神様がくださった絆です。神様が結び合わせてくださった、この世の中で一番強い絆です。ある意味では、夫婦の絆より強い絆でしょう。子どものために、祈りながら流す涙は、ある意味で一番価値のある涙ではないかと思えます。祈りの内に、泣き虫になってください。それがなかったら、『お母さん』といながらも、お母さんではありません。

ありがとうございました。